Mischievous Man＆Liar Woman

素人さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｉｓｃｈｉｅｖｏｕｓ　Ｍａｎ&Ｌｉａｒ　Ｗｏｍａｎ

【Ｎコード】
Ｎ９３３０Ｉ

【作者名】
素人さん

【あらすじ】
【Ｍｉｓｃｈｉｅｖｏｕｓ　Ｍａｎ&Ｌｉａｒ　Ｗｏｍａｎ（イタズラ男と嘘つき女）】
ごく稀に、人知を超えた”能力”を持つものが生まれる。
この物語は、その中でも珍妙な”能力”の持ち主二人の、何だかよく分らない物語。
イタズラ好きのザンティビー。
大嘘付きのフェイ。
相いれない二人が、だんだん惹かれあっていく。

※小説を書き始めたばかりなので、あれやこれやと試行錯誤に投稿しています。テストみたいなものです。まだ醜いところもあるかもしれませんが、温かい目で見守ってくれればと・・・思いまして、・・・。

プロローグ

――カシャン

機械的な小気味のいい音が、路地の闇の中へ消えていく。
その闇の中、艶やかな黒い髪と、魅力的な黒い瞳が存在を主張している。
彼女の漆黒の瞳は、闇の中に光って獲物を見つめる。

「ひっ、勘弁してくれ・・・！俺は・・・

――パンッ

乾いた音が、また闇の中に消えていった。
男は壁にもたれ、ズルズルと地面に倒れた。
スーツを着た男の額には、穴が開いていた。

「いやはや、素晴らしい腕前だね」

拍手と共に声が聞こえてきた。

「・・・誰」

今まで気配を感じさせなかったが、声と一緒に浴びるほどの殺気が送られてくる。
・・・が、その殺気はすぐに解かれた。

「まさか護衛部隊を壊滅させたのが年端もいかない女の子だったなんてね」

まだ幼さの残る、しかし凛々しい声は、闇に響いた。
青年は笑っている。笑っているが、その眼は彼女を見つめる。
先ほどのスーツの男とのやりとりの、逆のような構図だった。

「・・・質問に答えてないわ」

「おっと、これは失礼」

差ほど申し訳なくもなさそうに、男は軽く首を下ろした。

「僕の名はザンティビー。ザンティビー・クラムパーツ。」

「・・・そう」

しばらくの沈黙が続く。
二人ともピクリとも動かなかったが、ザンティビーの口が開いた。

「君の名は？」

人に名乗られたら名乗らなきゃ失礼だよ。とザンティビーが言う。
何か違うが、彼女は口を開いた。

「フェイ」

ややハスキーな声が、短くはっきり発せられた。

「ふむ・・・ではフェ

「ザンティビー様！」

ザンティビーの会話を遮って、奥からスーツの男が出てくる。
先ほどの男とは別の男のようだ。

「む・・！モーゼズ！」

消去法で、モーゼズとはあの地面に倒れた男のことだろうと察した。
スーツの男の怒気がフェイに向けられる。

「キサマか・・・！」

男は手を前に出し、力を込める。
すると男の腕から、赤褐色のオーラのようなものが発せられた。
国家直系にだけ許された、その”力”を解放した。

「まて、セオドール。この女に興味がある。」

「しかし、この女は！」

「二度と言わせる気か？」

ザンティビーの声が低く、鋭くなった。
セオドールは納得がいかなそうに腕をしまった。

同時にフェイも銃を下ろした。
ローブから伸びる白い手が美しい。この暗闇と重なって余計に白く見える。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――

「さて、フェイ。ここは行止りだ。」

それは私が一番よく知っている。モーゼズと呼ばれた男を、ここに追い込んだのは私なのだから。

「君には選択肢が二つある。」

ザンティビーが私に微笑んでいる。それは決して優しい物ではなく、イタズラ盛りの子供が、いい玩具を見つけたと言わんばかりの笑顔だった。

「一つは、僕等を振り切って逃げる。まぁ、この路地の外にはこいつ等みたいなのがたくさんいるけどね」

そう言ってザンティビーは、セオドールを親指で示唆した。

「二つ目はね、僕に大人しく捕まること。君に興味があるんだ。」

最後の一言はやけに楽しそうだった。

「それじゃぁ・・・、１つ目を選択するわ」

私はそう言って、ローブの中に閉っていた閃光弾を投げた。

――――――――――――――――――――――――――――――

――

「くっ・・・！眼が・・・！」

セオドールが呻きをあげている。
そのうちに私はザンティビー等をすり抜け、路地を一直線に戻る。

「甘いよ」

手を掴まれ、グイと引き寄せられる。
ローブのフードがずれ、頭が外気に触れる。

一陣の風が吹き、彼女の髪をなびかせた。

「・・・素晴らしい」

ザンティビーは眼を見開いている。

フェイの容姿は、やはり白く、整った顔立ちだった。
ザンティビーとフェイの眼が合う。
すぐさまフェイは顔を逸らしたが、ザンティビーは恍惚としていた。
吸い込まれそうな黒い瞳、血色の良い唇、髪の毛から香る柑橘系の甘い匂い。
それら全てが、ザンティビーを虜にした。

「やっぱり君、フェイは素晴らしいよ。美しい」

このまま彼女を自分のものにしたい。誰の目にも触れさせずに、
僕だけの所有物にしたい。
しかし、腕の中の彼女――フェイは、いつの間にか消えていた。

・・・能力、か。
厄介なものだ。

「ふ・・・ふふふ・・・ふはは、ははははは！」

「ザ、ザンティビー様・・・」

ようやく視力が戻ったセオドールが首をかしげている。

・・・いつか。いや、近いうちにだ。必ず手に入れて見せるぞ
どうやら僕は、今日名前を聞いたような存在に心惹かれたようだ。

イタズラな笑顔を張りつけたまま、ザンティビーとセオドールは闇に消えていった。

第1話（前書き）

誤字脱字やその他もろもろ、気をつけて入るつもりですが・・・
不安です。

第1話

夜明け。
太陽の光で、先ほどまでの暗闇は嘘のように消えてなくなる。
不思議な事に、その太陽は眩しくない。

私は夜明けが好きだ。空気がひんやりとしていて、
暗いのか明るいのか分からない雰囲気はやけに幻想的だ。
深呼吸をして、背伸びをする。

「ねむ・・・」

昨日から、正確には、一週間前からほとんど寝ていない。
ザンティビーの護衛部隊は思った以上に手ごわく、一人ずつ気付かれぬように
息の根を止めて行ったからだ。
スキが出る瞬間をずっと探っていたから、かなり疲れた。

しばらく歩くとボロ小屋が目に入る。
彼女――フェイは、ずっとあの小屋で過ごしていたが、それも今日で終わりだ。

護衛部隊殲滅は、言うなれば依頼だった。
クライアントは私にもわからないが、代わりに大金を払ってくれるという。
部隊のバッチを全て新聞社のロビーに置いてきたから、朝刊は当然書き換えられるだろう。

それを合図に、私のもとに大金が届けられる。
小屋の中のベッドの上で、これまでの疲れを取ろうと目を瞑ると、
一つの考えが脳裏をかすめた。
あの、セオドールとかいう男は、スーツだった。
腕からあんないかにもなオーラを出していたんだ。もしかして、もしかしなくても・・・
まだ依頼は終わっていなかった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「ザンティビー様！」
セオドールが日光浴中のザンティビーに声をかける。
胡散臭そうにサングラスを外したザンティビーは、サングラスの形だけ
日焼けしていなかった。
「マスコミに護衛隊称号があるそうです、私の分を抜いた全部ですよ！」
それを聞いたザンティビーは、ゆっくりと起きあがり言った。
「お前を抜いて全部・・・か、ならまた会えるかもしれないな」
ザンティビーの顔が、イタズラな笑みに代わる。

「あの女・・・完全に封鎖しきった路地を抜けて逃げ切るとは・・」

「ああ、それなら大丈夫。」

危険です！と言う前に、大丈夫だと言われてしまったセオドールは
多少面食らっている。
何が大丈夫だというのだろう。用心に越したことはないぞ

「彼女、フェイの能力なら大方想像はついてる。また会いたいなぁ・
・」

「・・・！」

この人は、計り知れない。
この人は弱冠２０歳で、誰もが羨むような物をすべて手に入れてき
た。
地位、金、女、名声、容姿、言いだしたらきりがない。
あの人の”能力”は、見方によると恐ろしい。

イタズラ。子供のような無邪気さ。
納得がいかなければ修正させ得るほどの力を発揮し、欲しい物があ
れば絶対手に入れる。
イタズラな強欲さの塊が、あの人の能力。
いや、あの人自身。

今度は、あの女が御所望か・・・

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――

コンコン

木をたたく音がする。俗に言う”ノック”である。

「・・・入って」

ボロい扉が音を立てて開き、小屋の中に光が入る。
先刻までの太陽とは別物のように、燦々と輝いている。
眩しさに耐えきれず、フェイは腕で影を作って訪問者を見遣る。

「まだ依頼が達成されておりません。」

全く感情のこもってない声が発せられた。
ようやく慣れた視界にも、無表情の男性が映る。

「分かってる・・あと一人だ。」

「期日はありません。確実に殲滅してください。」

期日はない・・・か、私の生活に期日が迫ってるってのに・・・。

「それでは、失礼します。」

ボロい扉を壊さぬように配慮したのか、静かに男は出て行った。

「・・・もうひと眠りくらいいいよね」

腹が空いては戦は出来ぬ、ってやつだ。

物語資料（前書き）

キャラが出次第、編集しますー

物語資料

今までに出てきた物（者）を詳しく載せておきます
ネタバレというほどのことはありませんが、本編ではないので飛ばしても問題ありません
（能力解説はある程度ネタバレかも・・・）

【登場人物】

フェイ
性別：♀
容姿：黒眼黒髪、白肌
体重／身長：４３キロ／１６５センチ
能力解説：人に嘘をつくような能力。
（備考）　発動中に、対象から”信用”されれば、それを幻想に出来る。
例えば、ザンティビーに捕まった時（プロローグ参照）に、
ザンティビーは掴んでるフェイを本物だと信じました。
能力の発動中だったので、フェイは消えてしましました
とさ・・・
（分かりにくい）

ザンティビー・クラムパーツ
性別：♂
容姿：蒼眼黄髪、健康的に焼けた肌
体重／身長：５５キロ／１７５センチ
能力解説：何でもイタズラにする能力。

（備考）　気に入らないことがあれば”我がまま”を通し、欲しい物は必ず手に入れる。
分かりにくいかもしれませんが、子供のようなイタズラな強欲を、全て叶える能力です。
もちろんイタズラも好きです

セオドール・クラムパーツ
性別：♂
容姿：黄眼黄髪、黒い肌
体重／身長：７０キロ／１６９センチ
能力解説：身体に流れる気を操る能力。
（備考）　一点に気を集中させて、爆発的な攻撃力を生みだしたり、
圧倒的な防御を得意とする。
”クラムパーツ”とは本当の名ではなく、ザンティビーに忠誠を誓う
証のようなもの。

モーゼズ・クラムパーツ
性別：♂
容姿：黄眼黄髪、黒い肌
体重／身長：５０キロ／１８０センチ
能力解説：セオドールと同じく、気を操る能力。
（備考）　セオドールの弟のような存在で、最強コンビと謳われたこともあった。
フェイによって殺されている。

マーキシン・ヘイド

性別：♂
容姿：白眼白髪、ゴム質の黄色い肌
体重／身長：１８２センチ／８０キロ
備考：ザンティビー護衛部隊殲滅依頼の、クライアントと繋がる謎の人（？）
機械のように動き、表情や会話にも感情を表したことがない。
機械なのか人間なのかは謎

っとまぁ・・・この辺でいいですかね
またキャラクターが増えたら、編集していこうと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9330i/

Mischievous Man＆Liar Woman

2010年10月14日14時09分発行